名所本にみる近代東京の都市風景の変容について

A Study on Generation of Landscape Value in Modernization of Tokyo

馬木 知子*
Tomoko UMAKI

Abstract : The urban environment of Tokyo had changed in Meiji era under the dramatic modernization. Landscape experience had also changed in parallel with the process above. The purpose of this article is to clarify the generation of landscape value, related with the change of the urban environment in those days. We analyzed representations of texts in 14 books of Meisho-bon, a guidebook for places of interest, in Edo and Meiji era. There were three characteristics. The one was the interest for structures. The landscape of modern structures was experienced with the same scheme as that of architectures of temples or shrines. The second was the interest for a row of houses along the street. In the middle of Meiji era, that kind of view disappeared in the process of urban development. Afterward, traditional style of old row of houses came to be regarded as beauty. The third was the interest for the townscape. In general, urban landscape of Edo and Meiji Era was principally formed by topographical properties, especially in Edo period. By the change of the urban structures in Meiji era, the beauty of townscape was discovered.

Keywords: Meisho, Scheme, Modernization, Tokyo, the Meiji Era, Landscape

キーワード: 名所, 見かた, 近代化, 東京, 明治期, 風景

1. はじめに

風景とは、単なる物的環境の視覚像ではなく、ある特定の「見かた」、すなわち集団や個人の経験、社会や時代背景などに起因する文化的な環境認知の枠組みや方向性によって規定される環境の眺めである¹⁾。したがって風景の変化について論じる場合、物的環境の変化だけでなく、「見かた」の変化に着目することは、有効な方法であると考えられる。

また風景は、「見かた」が個人の経験や状況などによって異なるものであるという点で個人的なものとしてとらえられる一方で、言葉や絵画などによって表象され表現されることによって、集団的・社会的なものになることもある。集団化・社会化された表象表現は、物的環境の「見かた」を規定するものであるばかりでなく、その「見かた」に基づいて、都市環境の改変整備など現実の物的環境の改変が行われるということは、先行研究も指摘するところである²⁾。すなわち集団的・社会的な「見かた」の考察は、風景の変化をとらえるだけでなく、都市建設における景観理念を議論する上で極めて重要であると考えられる。

明治維新後、東京は近代国家の首都として、都市の近代化、西欧化が進められた³⁾。江戸から東京へ、まちの姿も大きく変化した。本研究は、近世から近代への移行期にあって、近代化を目指した都市建設によって物的環境が変化していく中で、集団的・社会的な「見かた」がどのように変化したのか、特に、近代において指向された都市風景の特徴を明らかにすることを目的とする。

なお、近代の都市風景を議論する場合、集団表象としての「見かた」が顕著にあらわれるものとして、名所に注目することは適当なアプローチのひとつである。先行研究にも、名所絵に描かれた名所の立地特性から、近世から近代に普遍的な「見かた」の基盤としての地形の重要性を指摘する樋口らの研究⁴⁾、名所絵や写真に描かれた対象から、近代以降の「見かた」の変遷を明らかにしようとする大宮らの研究⁵⁾がある。また、都市を対象とするものではないが、自然的風景について、近代に新しい「見かた」を議論するものとして西田の研究⁶⁾がある。これらに対し本研究は、

近代化する都市の風景に関心を持ち、また、近世との比較においてその「見かた」を特徴付けようとするという点では樋口らと同様の方法をとるが、絵画資料ではなく名所本の記述を分析対象とする。すなわち、近代都市風景にどのような言語表現をもったのかという点に着目することで「見かた」を考察するものである⁷⁾。

2. 研究の方法

(1) 分析対象

名所本⁸⁾は随筆や小説などに比して個人的表象としての風景描写、あるいは新たな価値生成としての風景表現には劣るが、人々に名所をわかりやすく紹介するという目的と読者数の多さから、集団表象を把握するという点では有用な資料である⁹⁾。そこで本研究では名所本における風景描写の記述を分析対象とした。なお分析資料の選定にあたっては、江戸・東京の名所本のうち、著者・出版者が江戸・東京の人物・出版社であること¹⁰⁾、地名等の羅列ではなく風景を描写する記述があること、再版されているなど読者

表－1 分析対象とした名所本

時代	No.	文献名	著者・編者	出版年
江戸	①	江戸雀	遠近道印著	1677 延宝 05
	②	紫の一本	戸田茂睡著	1683 天和 03
	③	江戸鹿子	藤田理兵衛著	1690 元禄 03
	④	江戸砂子	菊岡治涼著	1732 享保 17
	⑤	江戸名所図会	斎藤幸雄・幸孝・幸成(月岑)著	1836 天保 05
明治	⑥	東京開化繁昌記	萩原乙彦著	1874 明治 07
	⑦	東京名勝図会	岡部啓五郎著	1877 明治 10
	⑧	東京案内	福田栄造著	1877 明治 10
	⑨	東京漫遊獨案内	梅亭金鷲著	1889 明治 22
	⑩	東京名所指南	菅復三著	1890 明治 23
	⑪	東京独案内	風月散史著	1890 明治 23
	⑫	東京新繁昌記	金子春夢著	1896 明治 29
	⑬	新撰東京名所図会	陸書房編	1900 頃 明治 30 ～40 年代
	⑭	東京案内	実業之日本社編	1914 大正 03
	⑮	江戸名所記	浅井了意著	1662 寛文 02

※時代区分は、江戸期については文献 8)、明治期については文献 3)を参照。

⑭は大正期の出版だが明治後期を補完するものとして、⑮は江戸の出版ではないが、江戸初期を代表する名所本であり参考資料として用いることとした。

*東京工業大学大学院社会理工学研究科社会工学専攻

表-2 定型的表现とその対象

資料No.		時代区分ごと出現数																資料No.		時代区分ごと出現数																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																				
		江戸								明治										江戸								明治																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																												
定型的表現		対象	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚	㉛	㉜	㉝	㉞	㉟	㊱	㊲	㊳	㊴	㊵	㊶	㊷	㊸	㊹	㊺	㊻	㊼	㊽	㊾	㊿																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																				
A. 『美麗・美しい』			4	1	0	3	3	4	4	1	2	4	8	4	11	15	0	5	3	3	9	14	30																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																	

数が多いことを判断基準とし、14誌を用いることとした¹¹⁾(表-1)。

(2) 研究の方法

分析対象とする風景描写の記述は、物的環境の変化する中で指向された風景を明らかにする目的から、物的環境の何を眺めたのか対象が描写されていること、それを肯定的に評価する表現を含むことを基準に抽出した。

抽出した記述には、常套的に用いられる(複数出現する)評価の表現があることが確認できる。このような表現(=定型的表现)は、物的環境の認知の方向性や枠組みを端的に示すもの、すなわち「見かた」が言語表現として表出したものと考えられる。

そこでまず3章で、定型的表现が示す内容を「見かた」として捉えなおし、これに基づき、4章で近世および近世・近代に共通の「見かた」を確認した上で、5章で4章との比較において近代に特有の「見かた」を示すことで、近代に指向された都市風景を明らかにした。

3. 都市風景の定型的表现の整理およびその特徴

まず定型的表现を、対象に関らず、表現の意味が近いこと、すなわち認知の方向性や枠組みの類似が考えられることを基準に類型化¹²⁾、定型的表现が捉える対象を整理した(表-2)。本章ではこれをもとに、類型ごとに、対象の特徴・変化を、主体の関心のもちかたや視点・視線のありかたとの関係という観点から説明することで、定型的表现を「見かた」として捉えなおした。

A. 『美麗・美しい』

「きらをつくす事金銀珠玉をちりばめて、善つくし美つくしたり(資料Na①:東叡山)」や「金銀珠玉をちりばめ名手の繪かつ彫物等を以て裝飾なしたる構造なれば堂宇の美麗…(資料Na⑨:文昭公御靈屋)」のように、建築の装飾や精緻は「善美を尽くす」、「美麗」といった表現によって愛でられることが多い。『美麗・美しい』という表現は、江戸から明治を通して寺社建築に、また明治期には洋風建築や邸宅、橋梁など、建築物や構造物自体に関心をもって、その精緻や技巧を觀賞し称える場合に用いられている¹³⁾。

B. 『壮麗・巍々』

「禪堂・衆寮・方丈・庫裡は左右に並びて巍然たり(資料Na⑤:万吉山松月院)」や「伽藍林間に聳え丹碧相輝き薨檻相接し建築の壮麗なる府下諸寺に冠たり(資料Na⑩:増上寺)」など、建築が高大であるさま、壮んであるさまを称える表現は、江戸から明治を通してみられる。なお江戸後期以降には、「貨食舗の亭造壮麗にして(資料Na⑤:飛鳥山)」や「輪奐の美を極めざるはなく(資料Na⑫:徳川靈屋)」のように、「壮麗」、「輪奐の美」など、高大であるというだけでなく、高大であることは美であるという感覚が読み取れる表現が用いられている。「美麗」が捉えるものと対象は重なるが、その緻密ではなく、壮大であることに注目する表現である¹⁴⁾。

C. 『清潔・きれい』

「洋式に倣清潔を極めけり(資料Na⑦:租税局)」のように、明治期に建設された新式の建築物や橋梁・道路、新築の寺社建築物は、「清潔」であると表現される。江戸期に遡ってみると、「奇麗に修造ありけり(資料Na①:芝日比谷神明)」など、寺社建築物の築造時について記述する場合に「きれい」の表現が用いられる。「清潔」・「きれい」はともに、清らであることに美を見いだす表現だが¹⁵⁾、同一の対象に時代を通してみられるものではなく、新しく築造されたものを称える場合の「見かた」であると考えられる。

D. 『厳か』

「宮社巍々として光をいやまし…石の鳥居石の坂數五十三壇誠に嚴重なり(資料Na③:山王大権現)」や「仰げば高き紫殿の莊嚴(資料Na⑥:上野東照宮)」のように、厳かであることを称える表現は、寺社や江戸城(宮城)に対して、江戸から明治を通してみられる。これらの例にもあるように、厳かであるという表現は、

巍々たること、高大であることと並べて用いられることが多い。

E. 『堅牢』

江戸期の橋梁は、木造で大火のたびに焼落するものであったが、明治初期になると石橋が出現した¹⁶⁾。このことは「其結構たる頗る堅緻を極め(資料Na⑦:浅草橋)」のように、構造物が堅牢、堅緻であることへの関心を促したのだろう。以降、「彫刻の精緻と、構造の堅固とを以て知られ、何れの名士でもこれを見て嘆賞せないものはない(資料Na⑭:須賀神社)」のように、建築物に対しても、「堅固」の表現をみることができる。装飾の美麗や姿の壮麗とならんで、堅固であるということも、明治期における構造物の「見かた」のひとつであったと考えられる。

F. 『殷賑』

建物がたちならぶ町並みの多くは、江戸から明治を通して、「棟に棟、軒に軒を重ね、にぎやかなる(資料Na②:馬場先の御門)」や「商店櫛比して頗る繁華の處なり(資料Na⑪:人形町通り)」のように、その殷賑、繁華が愛でられた。橋や広小路などの交通の要所、あるいは人々の集まる境内や公園も、風景がよいことと共に、その殷賑を描く表現が極めて多く見られる。

G. 『風景がよい』

「今此山に登りて眺望するに絶景なり、とほく品川の沖を見わたし、安房上總國手に取ばかりにおもふ(資料Na③:愛宕山)」や「東南は蒼海にして、房総の翠巒斜めに開け、芙蓉の白峰は、大城の西に峙ち、筑波の遠嶺は墨水に臨んで朦朧たり。台嶺・金竜の宝閣は、緑樹の陰に見えかくれて、おのづから丹青を施すに似て、風光さながら画中にあるがごとし(資料Na⑤:永代橋)」、「臺東の堤上に立て下瞰すれば。神田、日本橋、浅草、本所の諸市指顧の中に在り。安房上總の連山海を隔て淡靄の間に隱見し風景絶佳にして(資料Na⑬:田安の台)」のように、地形の緑¹⁷⁾や橋上からの地景を主題に、眼前や眼下に広がる市街地、塔などのランドマークとなるような建築物を添景とする眺めは、「絶景」や「美景」、「風景斜めならず」など、「景」の語を用いて、風景がよい、という表現でとらえられる¹⁸⁾。これは江戸・明治を通して多くみられる。また、「一面に紅葉の太木にして、秋のすゑ風景斜めならず(資料Na④:海晏寺)」のように、境内や公園の花や紅葉の盛んなさまにも、江戸・明治を通して同様の表現が用いられている。

前者が地形の緑から土地の様相を眺めるのに比して、後者は境内などの閉鎖的な空間を対象としており、両者は、対象とする空間のスケールが全く異なる。しかし、主体を取りまく環境を、主体が視線をめぐらせ視点を動かしながら、視対象を特定せずに眺める、という点では類似しており、この主体の視点・視線のありかたの類似が、「見かた」の類似に表れていると考えられる¹⁹⁾。

H. 『趣がある』

「紅紫・翠白枝を交へ、さながら錦繡を晒すがごとく、幽艶賞するに堪えたり(資料Na⑤:隅田河の堤)」や「老樹鬱茂し庭あり池あり幽閑の趣を極めて居る(資料Na⑭:浅草寺)」のように、境内や公園、庭園の鬱葱としたさまや、花や紅葉の盛んなさまを、「風趣」、「幽趣」など、趣があるものとして誉める表現は、江戸後期以降、明治期を通して出現する。また「近くは葛飾の村落、遠くは国府台の翠巒まで、ともに一望に入り、風色もつとも幽趣あり(資料Na⑤:聖天宮)」のように、Gの『風景がよい』と同様の意味合いで、風景に趣がある、と用いられる例も江戸後期以降にみられる。『趣がある』がとらえる対象は、『風景がよい』と同様に空間のスケールが様々である。両者は、主体が視線や視点を移動させながら対象を眺め、その眺めを、情感がある、佳である、と評するものであり類似する「見かた」であるいえよう²⁰⁾。ただし『趣がある』は境内などの閉鎖的な空間に多く用いられる傾向があり、身体の近辺にある対象を味わうという点に差異があると考えられる。

一方「風致」は「風趣」と同義の語だが、「風趣」のような境内や

公園の花の盛んなさま、草木の鬱葱たるさま、あるいは地景を対象とする例は見あたらぬ。明治後期のみにみられ、「大道の風致を添えんがため柳を両側に植ゆ（資料Na⑫：銀座街）」のように、町の眺めに趣を「添える」ものとしての草木のありようや、木々と都市施設との取り合わせに趣を見いだす場合に用いられている。

なお「今はむかしに異して家居たちつゞきたれども猶雪景色よし（資料Na④：向岡）」や「昔より閑雅の地にして鶯の名所たりしも、今は往来繁く殊に東北汽車の開通せし以來大に其風流を殺したり（資料Na⑫：根岸の里）」のように、都市化によって風景あるいは風趣が失われることを、名所風景の俗了として非難するような表現は、江戸・明治とも都市が成熟してくる中期以降にみられる。

I. 『奇観・壮観・美観』

「観」の字は眺めの意味をもつが、「風景」や「風色」などのように地景に用いられる例は少ない。江戸後期においては、花や紅葉、またそれを楽しむ群衆に対して用いられるが、明治期には建築物や町の眺めに対して用いられるのが特徴的である。

殊に明治期の「美観」に注目すると、明治初期においては「煉化石を累築したる百尺突建の一美観あり（文献Na⑥：電信局）」のように、建築単体を見ものとしているが²¹⁾、明治中・後期になると、「司法省は西日比谷町にありて巍峨たる煉瓦造の新築なり。…大審院、控訴院、地方裁判所も亦稍似たる新築にして。司法省と相接して巍立せり。其美観なる…（資料Na⑬：日比谷）」のように、建築等の都市施設によって構成される町一帯の眺めを「美観」とするような「見かた」が出現する。

加えて、明治中・後期の「壮観」や「奇観」には、「大小の工場、煙突隆起、煤煙漲らし（中略）太だ奇観を呈せり（資料Na⑬：月島）」のように、所謂美しさではなく、その奇異を、町の眺めとして楽しむかのような例がみられる。

町の形姿を眺め、『奇観・壮観・美観』と評する「見かた」は、明治初期に当初は建築単体を対象として芽生え、明治中・後期にかけて町一帯を対象とするという展開があったと考えられる。

J. 『整然』

町並みが整うことに着目した表現は、江戸中期までは見られず、江戸後期によく、「駅舎数百軒整々として両側に聯なる（資料Na⑤：河崎の駅）」という記述が確認できる。その後、明治前・中期にはほぼ見られず、明治後期に、主にレンガ造の建築が建ちならぶ町並みを対象として、「左右煉化造の家屋は、整然櫛比（資料Na⑬：南金六町）」のように「整然」という表現が用いられている。

4. 近世・近代に共通する都市風景の「見かた」

本章では、それぞれの定型的表現の内容を踏まえ、近世・近代に共通する3つの「見かた」を以下に確認する。

(1) 寺社建築物の美麗・壮麗

名所には、神社仏閣が多い²²⁾。近世・近代を通して、寺社建築物は観賞の対象であり、装飾の細やかさやつくりの緻密さに美麗が、高大さや巍然に壮麗が見いだされてきた。これは、「金銀を以てのべ付た（資料Na①）」ような、現前する対象を実際に見て美麗、壮麗と評しているだけではなく、神仏への信仰、畏敬の念が含まれた観念的な美的感覚をとまなうものであることは、前章Dに示したように「壮麗」と「厳か」が並べて用いられることから推察される²³⁾。寺社建築物に対する観念的な美的意識をもって、現前するものを美術品を観賞するように愛でるのが、「美麗」、「壮麗」であり、近世以来近代に続く「見かた」のひとつである。

(2) 町や行楽地の殷賑

町や行楽地は、その繁昌、人々に賑わうことが重要であったことは、表-1の記述数が示すとおりである。特に町については、近世・近代で町に建つ建築の様式が異なるということに関わらず、ともに商店が隙間なく並び、人々に溢れるさまが注目されている。

このことは都市の繁栄を示す意図のあらわれであるとともに、近世・近代を通して、町を眺める場合、空間が埋め尽くされている状況こそが評価すべき点であることを示しているといえよう。

(3) 地形に起因する眺め

地形の縁から土地の様相を眺望するような、地形に基因する眺めを、「風景がよい」とする表現は、近世・近代を通して極めて多くみられる。3章Gで示したように、視対象がひとところに定まらない主体の態度を特徴とするならば、絵巻物や屏風絵の鑑賞にも通じる「見かた」であるともいえる。その地形の上に形成される物的環境が江戸から東京へと大きく変化しようとも、近世から近代に綿々と続く「見かた」のひとつである。

5. 近代特有の都市風景の「見かた」

(1) 洋風建築や橋梁の「美麗・壮麗」

寺社建築物を観賞する定型的な「見かた」である「美麗」や「壮麗」は、明治以降、洋風建築や橋梁に対しても、用いられるようになった。

洋風建築は、明治期に新しいものであり、文明開化あるいは近代化の象徴として、驚きや礼賛をもって迎えられた。建築自体が見るべき見ものであり観賞すべき対象であるという点、そこにある種の畏敬や礼賛の念が含まれるという点は、寺社建築物にも通じる。両者が同属の、美術品を観賞するような態度で眺められるべき素地は十分にある。さらに、明治期の洋風建築のとらえかたが、江戸期の寺社建築のそれと似ているのは、言語表現に限らない。名所本における明治期の洋風建築の挿絵や写真は、表象表現の技術としては町全体を描きうるものであるにもかかわらず、建築を単体でとらえようとするものが極めて多い（写真-1）。そこには単体に注視する態度があり、江戸期の寺社建築のみを描いた挿絵と、同じような態度であったことが推察される（図-1）。洋風建築という新しい対象は、概ね旧来の寺社建築物と同様の「見かた」でとらえられたものといえよう。

一方橋梁は、構造の違いに目を向けなければ、江戸の町にも存在した。ただし江戸期、橋梁自体は観賞する対象ではない。橋は、交通の要所として殷賑極まりない地であり、あるいは近傍の賑わいを前景に遠方の山々を望むようなよい風景を得る視点場であるという点で、市中の名所であった。それが明治初期になると、「精巧善美つくし（資料Na⑥：萬世橋＝石造アーチ橋）」や「壮麗を極むる（資料Na⑦：日本橋＝木造洋風桁橋）」のように、橋自体を観賞する態度が出現する。それまで目にするものになかった新式の構造をもった橋を目にして、橋梁も建築と同様に、観賞の対象になることに気付いた、と考えられる²⁴⁾。

(2) 町の「整然」という美的感覚

江戸後期になると、街道沿いなどに建物が整然と建ちならぶ町並みが出現し始めた²⁵⁾。そのような町並みの多くは「伝舎・酒舗軒端を連ね、繁昌の地たり（資料Na⑤：板橋の駅）」のように、建物の建ちならぶ様子・構図よりも、概してその繁昌・殷賑こそが愛でるべき点として記述されている。

ただし、駅舎や商家が軒を揃えるさまを「整々」とする表現も、名所本の記述と

写真-1 「印刷局」

図-1 「増上寺」

して江戸後期には確認できる。江戸名所図会の挿絵からも、整うさまは注目すべき対象であったと推測される(図-2)。少なくとも町の「整々」を眺めるという「見かた」はあったのだろう²⁶⁾。

明治期、整然たる町並みを呈した町のひとつに、銀座煉瓦街²⁷⁾がある(写真-2)。明治初期には、「石又は煉瓦石を以て築きたる西洋造りの家屋軒を並べ煙突空中に聳へ街道には二條の花木を植え布くに磚石を以てし中央を馬車道とし両側を人道とす」の様子を、「清潔美麗なる人をして異域に入るの想を為さしむ(資料No.⑧)」と初めて目にした洋風の町への驚き、清新さ、美麗を誉めるが、「整然」という表現はみられない。

明治中期になると、「市街を三條に分ち左右を人道とし中央を車馬道とし其堺には柳を樹て位置井然たり(資料No.⑪:銀座煉瓦街)」のように、整然とした町並み、というとらえかたがみられるが、しかしそれも銀座の一例のみである。明治中期にも、土蔵や洋風建築が整々と建ちならぶ町はあったが²⁸⁾、その形・構図が整うということを殊更に記述するような例はなく、「整然」という「見かた」がどのような感覚を伴っていたのかは判然としない²⁹⁾。

明治後期、それまで土蔵が整然と建ちならんでいたような大通りは、市区改正によって土蔵と西洋建築が入り乱れる町並みへと変貌し、そのさまは百鬼夜行とも非難された³⁰⁾。整然さを失ってようやく、整っていないことは醜いということに気付いた、すなわち整うことが美と結びついたのである。大正3年になると、「整然たる美観(資料No.⑭:銀座煉瓦街)」と言われるように、整然たることに美を見いだす「見かた」が出現している。

ところで、整然を美という場合、例えば、「街区整然たる所堂々天を衝く赤煉瓦屋三層或は四層に及び、他に一物をも交へず肩々相接して凱旋道路地先に齊列³¹⁾する美しさ(資料No.⑭:日比谷)」という記述がある。整然とした街区に洋風建築が整列しているさまが美しい、というものである。この「整然」といわれる街区の原型は、屋敷の建ちならぶ街区として江戸期に形成されており、いわば江戸の遺産の上に形成された町である。写真を見ると、店蔵や煉瓦街のように建物がファサードを揃えているのではなく、洋風の建築物が密に並んでいるのがわかる(写真-3)。すなわち、整然、整列を美という場合、揃っているということを美とするだけでなく、江戸を一掃して近代化を象徴すべき建物が街区に充満していることを称える、近代化する都市を礼賛する観念的な意味も含まれたのではないかと考えられる。

(3) 町の「美観」と「風致」

「美観」が、建築や道路など都市施設によって構成される町の姿をとらえる、明治に新しい表現であることは、3章で確認した通りである。しかし、町を眺める、という態度が、明治期以降に全く新しいものというわけではない。江戸名所図会の挿絵にも町を眺めるものは多いが(図-3)、それでも江戸期には、町の景の主題は賑わいにあったのだろう。前述の「整然」もそうだが、建物によって構成される町の眺めについての定型的な言語表現は見あたらない、すなわちそれは風景として言分けされるべき眺めではなかったのではないかと。明治になって洋風建築を愛でるところに「美観」への気付きがあり、煉瓦街、一丁倫敦など洋風建築の建ちならぶ町並みの出現という物的環境の変化によって、町の「美観」という「見かた」が生まれたと考えられる。

図-2 「駿河町 三井呉服店」

写真-2 竣工当時の銀座煉瓦街

「風致」もまた、明治後期のみにもみられる「見かた」である。「風趣がある」という「見かた」は、江戸・明治期とも境内や公園の木々、花などの自然を対象とすることが多いが、この「風致」は明治後期になって、町中に出現する。建物に添えられた木々は、町の中であって趣を創出した。建物の美麗や偉観ばかりに注目する町の景ではなく、自然的要素と近代的な人工物の取り合わせに趣きを味わうという態度が読みとれる。

建築によって構成される町の「美観」と、それに趣を添える「風致」、これに江戸以来綿々と続く地景への眼差しが相俟って、明治らしい、ともいべき風景を呈した場所の一つが、お濠端一帯だろう(写真-4)。そこには洋風建築の建ち並ぶ「美観」、それに取り合わせられるお濠の水や宮城の鬱蒼たる緑という「風致」があり、ある場所からは市中を見渡し、あるいは富士山を遠望することができた。洋風建築を除けば江戸から引き継いだ環境である。絵画表現をたどれば、まだ屋敷が建ちならんでいた江戸後期にも、これを眺める視線は存在したが³²⁾(図-4)、名所本ではこの付近からの眺望は「風景がよい」と表現される、すなわち視対象を定めず、絵巻物を観賞するかのような態度をとる。一方「美観」や「風致」は、視対象を定めた「見かた」であるともいえる。洋風建築の出現という物的環境の変化だけでなく、これらの新しい「見かた」が旧来の「見かた」に重ねられたのが明治のお濠端だといえよう。

6. まとめ

(1) 洋風建築はそれ自体が、「美麗」や「壮麗」といった「見かた」でとらえられた。この「見かた」は、近世・近代に寺社建築をとらえる場合にみられるものである。つまり近代になって出現した洋風建築という新たな物的環境に対して、既存の「見かた」が援用されたといえる。また橋梁も、明治になると、建築物と同様の「見かた」によってとらえられるようになる。近世の橋梁は、視点場・股賑の地として名所だったが、視対象ではなかった。橋梁の構造が刷新されるという物的環境の変化によって、視対象としての橋梁に気付いたものと考えられる。

(2) 銀座や日比谷などでは、街区に洋風建築が建ちならんだが、そのような町並みは「整然」という「見かた」でとらえられた。町並みに対するこのような「見かた」は近代に新しいものではなく、土蔵が建ちならぶ町並みに対して、江戸後期には用いられている。加えて、整然たるさまを美しいとする「見かた」は、明治後期に出現する。これは、明治中期以降、市区改正によって土蔵が整然と建ちならぶ町並みが失われていくなかで、「整然」が美であると気付いたとことによると考えられる。つまり物的環境の変化によって新たな「見かた」が生まれたといえよう。

(3) 洋風建築や橋・道路など近代的な都市施設によって構成さ

写真-4 お濠端(明治後期)

図-4 お濠端(江戸後期)

写真-3 霞ヶ関から桜田門方向

図-3 町の景の例(「今川橋」)

れる町の姿は、「美観」という「見かた」でとらえられた。近世の町は、殷賑こそが目すべき対象であった。新たな物的環境の出現によって、諸都市施設が視対象となることに気付き、「美観」という新たな「見かた」が生まれたと考えられる。また、町中の草木と洋風の都市施設の取り合わせは、「風致」という「見かた」でとらえられる。近世には、草木と都市施設の関係に趣がある、という表現はみられない。すなわち、草木は目新しいものではないが、新たな物的環境との取り合わせによって、新しい「見かた」が生まれたと考えられる。「美観」や「風致」のように、都市施設によって構成される町の姿を眺める態度は、明治中・後期になって獲得されている。

(4) 地形の縁からの土地の様相の眺めや草木のありさまは、近世・近代を通して「風景がよい」と愛でられた。都市施設が著しく変化しようとも、基盤にある地形への関心は綿々と続いていることがわかる。明治らしい風景を呈したお濠端も、近世以来、地景の勝れた場所だった。加えて、この付近に新たに建設された都市施設は、「美観」や、「風致」といった「見かた」でとらえられた。物的環境の変化に対して、新旧の「見かた」が重ね合わせられることで、近世以来の風景が、近代の風景に更新されたといえよう。

補注および引用文献

1) 阿部一 (1995)：日本空間の誕生 コスモロジー・風景・世界観：せりか書房、「見かた」について、視覚による環境認知の方向性であり、かつ環境の情報を受け入れるための枠組み (型) であると定義づけており、この語を援用する。

2) 樋口忠彦 (1989)：風景と型：日本の美学 第13号, 61-71, ベリかん社 参照。なお樋口は、集団に共有される風景の「見かた」を、「風景の型」と表現したうえで、「風景の型はずっと力もち続けるわけではない。この影響下から新たな表象・表現が生み出され、これが風景の新しい見方、新しい風景の型になっていく。時には、かつての風景の型が復活することもある。風景は、このような変化のプロセスとしてとらえることができる。」と指摘している。本研究もこの立場をとるものである。

3) 小木新造 (1980)：東京時代：日本放送出版協会、25-27

4) 樋口忠彦・杉山公彦 (1982)：明治期東京の名所の変遷過程に関する研究：第17回日本都市計画学会学術研究発表会論文集, 511-516

5) 大宮直記・下村彰男・熊谷洋一 (1995)：名所図会・百景にみる近代以降の東京における「景」の変遷に関する研究：ランドスケープ研究 58(4), 429-437

6) 西田正憲 (1996)：瀬戸内海の近代的風景の発見と定着-風景観の変遷過程に関する研究-京都大学学位論文

7) 絵画における表現技法や構図は「見かた」の表出にはかならず、また、江戸後期から明治期における絵画表現の変化は風景の「見かた」に多大な影響を及ぼしたと推察され、議論すべき題材だが、これについては今後の課題とし、本稿では補完的な利用にとどめる。言語表現は、視覚像としての風景を議論する資料としては劣るが、何をどのように見たのかが記述されるため、風景を体験する主体の態度である「見かた」を把握するにはすぐれた資料である。

8) 鈴木は、江戸の名所本について、一般庶民に流行し定着していたこと、情報の共有化がなされていたことを指摘しており、集団表象としての「見かた」があらわれる背景を考えてよいだろう。また、近世以降の名所は、中世以前の和歌に見られる歌枕としてのナドコロ (知識教養としての名所) にとどまらず、実際にそこへ行って見るべき・体験すべき対象として捉えられるものであったことも確認しておく (以上、鈴木章生 (2001)：江戸の名所と都市文化：吉川弘文館, p.28, 109 参照)。

9) 名所本は、江戸・東京という都市の名所を紹介し、またその繁栄を知らしめるという目的をもつことから、風景を記述する表現が、形式的あるいは観念的になる傾向がある。したがって実際に体験された風景の「見かた」とはずれがあり、また当時多様であったであろう「見かた」のうち、大衆の関心をひくような宣伝効果を期待したものに偏った議論をすることになる。本稿の考察はかような課題を残すが、一方で形式的・観念的な「見かた」は、集团的・社会的な「見かた」を端的に表すものであり、近世から近代への、「見かた」の大局的な変化をとらえるという点では、有効な方法である。

10) 定住者と非定住者では「見かた」に違いがあると考えられること、また、言語表現そのものに地域性があることを考慮し、著者・出版社を江戸・東京に限定した。

11) 前掲書 8)、港区立三田図書館 (1975)：江戸東京地誌検索、樋田満文 (1994)：東京記録文学辞典・柏書房、羽生冬佳 (2003)：江戸東京の名所の変遷に関する研究：東京工業大学学位論文を参照し、江戸 27 誌・東京 124 誌から選定した。小木は、明治期は 22.3 年を境に、前期が江戸からの移行期、後期はそこから決別し都市化を更に進める時期であるとしている (前掲書 3)、204-207)。このことから本稿では、前期のみで近代の「見かた」を捉えるのは不十分と考え、明治後期までを対象とした。また、名所本によって網羅する地域が異なるが、江戸・東京という都市名を冠する名所本に含まれるものであり、その都市イメージから逸脱するものではないこと、また、本研究は行動範囲ではなく「見かた」のパラエティを得ることに関心を持つものであるため、地理的な都市境界を設定して対象地を絞ることはしなかった。

12) 言葉の意味の確認にあたっては、江戸期については江戸後期の日常語が収録されている前田勇雄 (1974)：江戸語大辞典：講談社、明治期については当時の代表的な辞書を復刻収録した飛田良文編 (1997)：明治期国語辞書大系 普 1-12：大空社を用いた。

13) 「美しい」という言葉は、清らという感覚とともに、「くはし」すなわち細微である、愛らしいという感覚を伴うという (高階秀爾 (1991)：日本美術を見る眼：岩波書店、3-5)。本研究に用いた名所本の記述における「美しい」は、後者の意味合いが強い。なお、江戸名所図会には、建築を「くはし」の感覚で「美しい」とする言語表現は確認できないが、その挿図には寺社建築物の細部が緻密に描かれており、江戸後期にもそのような感覚はあったと考えるのが妥当だろう。同名所本は他に比して挿図が著しく多く、言語と絵画によって相互補完的に風景の表現を試みたものと考えられる。

14) 明治 30 年の新聞に、末松兼澄 (美術学者) による「美」の議論がある。その中で、「美麗」と「壮麗」が、古くから「美」の二大局面として捉えられてきたこと、日本では小さく可愛いらしい「美麗」が「美」であり、壮ん・大きく恐ろしいという「壮麗」の感覚が欠けていると指摘している。(讀賣新聞、明治 30 年 6 月 28 日及び 7 月 5 日付参照)。しかし、寺社建築や洋風建築の美に関してはその限りではなかったと考えられる。

15) 「清潔」、「きれい」の解釈については、前掲書 13) を参照した。なお、言葉としての「きれい」は、本研究に用いた名所本では新築時に用いられる傾向が確認されたが、同書によれば、「美しい」という言葉は清らという感覚を備えたものであり、本稿 3 章 A で示す「美しい」という表現が用いられる場合も、感覚としては「きれい」や「清潔」を含むものがあると考えられる。

16) 東京初の石造の眼鏡橋は、明治 6 年竣工の万世橋。浅草橋をはじめ、明治 10 年頃にかけて多くの石橋が架設された (中央区教育委員会社会教育課文化財係 (1998)：中央区の橋・橋詰広場―中央区近代橋梁調査―：中央区教育委員会、資料編を参照)。

17) 名所には、地形の境目である崖や水辺を視点場とするものが多いことは先行研究にも指摘されている。樋口は、このような場所に重視し、「山の辺」、「川の辺」、「水の辺」といった表現を与えている (樋口忠彦 (1993)：日本の景観：筑摩書房)。

18) 明治中期の辞書 (物集高見 (1888)：ことばのはやし：清水卯三郎)に、「風景」について「けしき。ありさま。やまかわのさま」と説明がある。これに照らしても、風景がよい、という定型的表现は、山水すなわち地形に起因する眺めを愛する意味合いが強いと考えられる。また「景」の字には、「ひかり、ひざし」といった意味があり (諸橋轍次 (1958)：大漢和辞典：大修館書店、巻 5；1991 年修訂版参照)、自然的な対象をとらえる語であることがわかる。

19) 諏訪は、近世後期以降の風景画についての議論の中で、全体の構成よりも、部分をかためる寄木細工 (モザイク式) の構成をとるのが普通であることを指摘している (諏訪春雄 (1998)：日本人と遠近法：筑摩書房、163-169 参照)。また高階は、日本の芸術表現について「遠近法や明暗法が発達しなかったということは、とりまおさず自然と対峙する人間がいなかったということである。単に広い意味で「写実的」ということを言うなら、日本美術においても写実的な表現がなかったわけではない。(中略)ただそこに欠けているのは、緻密な描写によって捉えられた対象とそれを描く画家とのあいだの位置関係、つまり自然に対立する人間という意識である。(中略)作者の視点ということから言えば、それはどこか一定のところに動かずにあるのではなく、部分の場面場面に応じて自由に移動している。」と述べる (高階秀爾 (1978)：日本近代の美意識：青土社、182-183)。すなわち、風景画や自然を対象とした絵画表現の特性として、客体のスケールや構成よりも、主体の視線・視点のありかたが重んじられる傾向があるといえる。これにしたがえば、名所本における言語表現についても、客体よりも主体の身のありかたの類似が、「見かた」の類似に表れているという推論は妥当だろう。

20) 辻は、日本人の自然描写は、冷静な客観というよりも、見る側の感情移入、感傷を特色としていると指摘している。地形や草木等の自然を対象とする『風景がよい』の「よい」には、情感があるという感覚も含まれていると推察される。なお名所本では、「幽趣」といった表現は江戸後期以降にみられたが、中世から「あはれ」や「をかし」など情感を示す表現はあり、近世以降に特徴的な態度とはいえない (辻惟雄 (1992)：日本美術の見方：岩波書店、13-23 参照)。

21) 明治初期の新聞に、橋梁について「府下の大観ともなるべき」とする記事があるが、この「美観」には「みもの」のルビが振られている。このことから、明治前期には、見ものとなるような新式の都市施設に対して、「美観」の表現が用いられていたことが推察される (郵便報知新聞、明治 6 年 11 月 29 日付参照)。また、「観」の字自体も、「みもの」の意味をもつ (諸橋 (1958)：前掲書 11)、巻十参照)。

22) 前掲書 8)、207-209

23) 名所本の記述を見ると、近世には、観念的な表現が顕著であるのに対し、近代にはさほどではない。これは、近代において寺社に対する畏敬の念が薄れたと考えられるよりは、言語表現の変化、すなわち近世においては美辞麗句が多用されたのに対し、近世は写実的な表現へと移行していったことがその要因と考えられるべきだろう。(以上、言語表現の変化については、李孝徳 (1996)：表象空間の近代：新曜社、94-97 を参照)

24) 明治期の表象表現が、観念的な美ではなく、現前性を重視し写実に移行しつつあったことは留意すべきである。即ち橋梁への関心の発生は、新式の構造物への関心と同時に、町の事物を均一に・観察的に眺めようとする態度によるという解釈もありうる。

25) 内藤は、江戸期について、街道に沿って町割りが概して直線的におこなわれ、両側に町屋が整然と並ぶのが一般的だったこと、防火対策上、主要街路に面する町屋を瓦葺き・土蔵造りに建替えることを求める法 (享保五年 (1720)) と棟高制限 (文化三年 (1806)) があったことで、街並みに統一性が生まれたことを示している (以上、内藤昌 (2001) 日本 町の風景学：草思社, p.83, pp.146-147)。また、玉井は、17 世紀半ばには、整った町並みがあったことを指摘している (玉井哲雄 (1986)：江戸 失われた都市空間を読む：平凡社, p.78)。

26) 建物が整然と建ちならぶさまの表象表現として、18 世紀半ば以降、遠近法を用いた風景画が登場する。それが多色刷りの木版画として庶民に普及したのは 19 世紀のことのようだ (岡泰正 (1992)：めがね絵新考：筑摩書房, p.183)。当時、遠近法を用いた町並みの絵に、構図的な面白さを見出したことは想像に難くない。

27) 明治 6 年 10 月竣工。

28) 藤森照信 (1990)：明治の東京計画：岩波書店、85-87

29) 石黒は、明治・大正期の東京の写真を多く収集しているが、店蔵の建ち並ぶ通りを写したものは少なく、写真が撮られるようになった明治期には、ごく当たり前の見慣れた町の風景であり、被写体として魅力がなかったのではないかと指摘している (石黒敬章 (2001)：明治・大正・昭和 東京写真大集成：新潮社, p.183)。整った町並みは、注目すべきほどのものとしてとらえられていなかったと考えられる。

30) 前田亨 (1994)：東京 都市の明治：筑摩書房、231-235

31) 「齊」は、そろい整う意を表す。また、連なる意を表し、ひとしくそろう意。

32) 広重の名所江戸百景をはじめとする浮世絵や、江戸土産として江戸末期に登場した泥絵など、お濠端の風景を描くものは珍しくない。

図・写真典拠

図-1：江戸雀 (資料№①、菱川師宣画=江戸叢書刊行會編 (1916)：江戸叢書巻の六) より転載。

図-2：江戸名所図会 (資料№⑤、長谷川雪舟画=筑摩書房 (1996)：江戸名所図会 1) より転載。

図-3：江戸名所図会 (前掲図-2) より転載。

図-4：大熊喜邦 (1939)：泥絵と大名屋敷：大塚巧藝社より転載。「櫻田門外の圖」

写真-1：新撰東京名所図会 (資料③、睦書房編 (1898)：新撰東京名所図会麹町区之部) より転載。

写真-2、3：文獻29) より転載。

写真-4：小川一真 (1911)：東京風景より転載。「三宅坂ヨリ司法省ヲ望ム」